

「キリストのうちに」

～真理にとどまる～アレーテイヤすべてが照らされていてかくされていない
エメト 持続的普遍で堅固～
ローマ8：1～13

ある中学校が試験の問題に、作家の五味太郎さんの作品の中から、国語の入試問題をつくりました。この問題を五味太郎さんが解きました。“作者はこの部分をどう思うか、3つの中から選びなさい。”という問題でした。五味さんの結果は56点でした。なぜこのような問題起るのでしょうか。それは、問題を作った人が作者の気持ちを理解していなかったからです。多くのクリスチャンはこれをして、イエスキリストがこの地に来られた本当の意味が分からないで、本当の趣旨とは違う生き方をしているのです。

■ キリストのうちに

～真理にとどまる～アレーテイヤすべてが照らされていてかくされていないエメト持続的普遍で堅固～

8章1節はもう一度救いについてかかれています。冒頭の“こういうわけで”の箇所は1章～7章の歩みが記されています。私達は罪の崇熱で、何をやっても何を企んでも結果、欲の為、自我の為、自己中心が為、どれだけ愛すると言って約束をしても、結局愛を受けることができないと、満たされなくて、壊してしまう、そんな話でした。クリスチャンの悲劇は“それに死ななければ”と、“頑張る愛を流さなければ”というところでとどまっているのです。神様に近づこうという思いから礼拝に来るのではなく、何かそこで必要とされていることが救いの完成であると考えてしまうのです。行動義認だからです。あなたの行いによって認められることが必要とされる事である、これは与えることなので素晴らしい事ですが、何故与えるのかというと神様から愛されたという恵みを知るから与えたいわけです。肉に死んだと決断した(1章～7章)後、8章1～14節の、御霊に生きていくところにつながります。罪ある人間の元に、また律法の家(原理)に生きてきた人たちが、御霊の原理に生かされるようになり、それは、あなたの、昔の生きていたあなたが、死んだら、あなたの罪による契約はもう消されるんだよ、ということ成したかったのです。その為には、誰かが死ななければならなかったのです。あなたの為に誰かが死んだその事と、あなたが結びつく理由はあなたの為に、死ぬる人が死ななければならなかったのです。自分に罪を持っている人が死んだからといって、死んだ意味がないのです。

■ 6章、7章の復習と確認(1節～2節)

御霊に生きる決断をした人にとって、新しいお父さんができました。これには養育的概念があって、誰かのものになっていたのを、もう一度本当のお父さんに養育されるようなことです。“アバ父よ”と呼べるようになると、愛され満たされ慰められます。その人は、次に小学校に入りたての子どもが感じるように、自分の思う通りにはならない事、そんな事を経験します。そして日々のそんな出来事をお父さんに話します。そうすると、慰められ、次にどうしたらいいのかをお父さんは子に伝えます。そのことを聞いた子は次の日実践しようと聞きます。が、現実という社会があります。ここが、あなたが生きてきた肉の原理の生き方のルールなのです。例えば、道を無意識に運転するとき、いつもと同じルートを通ります。しかし、意識をすると別のルートで良い道を通ることが出来ます。前者が古い原理です。新しい生き方を知っていても、無意識に同じルートを通ってしまいます。途中、古い原理に歩んでいることに気づいたとしても、古い原理は、自分がその間違ったことを認めることを非常に嫌い、Uターンせず進みます。しかしUターンする事、それが御霊に生きるという生き方です。私達は昔の癖があるのでついつい古い原理に引っ張られやすいのです。そのまま、走って行ってしまいたくなりますが、“そっちは駄目だよ”と言われた時、どういう思いであれ従うのが服従です。“やってみる”です。神様が力と役割が任せられているナビゲーションの声に聴いてみる必要があります。もし、ナビゲーションが相応しくなかったとしてもその責任は神様が取ると言っているのです。神様が育成するのであって、あなたは裁く必要が無いのです。「神によらない権威は一つもありません。」大切なのは御霊のナビゲーションに服従していくことです。

■ とりなし

御霊はあなたの内側でとりなしています。深いうめきに心を傾けないと聞こえませんが。(26節)御霊のとりなしはあなたの内側でひっそりと成されています。でももしあなたというものが無くなっていればそのとりなしの故にそのまま力が出てきますが、あなたがそこにいとこの祈りはそこで止まります。(28節)の“益”となり、そして、(30節)の“義認”となっていきます。このようにクリスチャンとは簡単なのです。しかし一番難しいのは自分が罪人であることが分かる事です。ですから、罪人である私達は今日から神様に生かしていただくために、何を最優先にすればよいかというと、いつも神様の前に1対1で出る事です。これを選べばあなたは変わります。そうすれば恵みの中であって義と認められ、世の中で裁きに遭って迫害に遭いますが、神の愛から引き離すものは何もないのです。私達の人生の最後

は、様々な苦難の中にあっても愛の中で恵みとして喜んで生きて、喜びで、どんな境遇の中にあっても喜んで生きられるように変わったという人生が変わります。それは、私達が努力するのではないとわかった人の生き方です。独りでやり、頑張るのは大変です。私がしなくてはいけないと、憎んではいけないと、怒ってはいけないと、闘って、我慢します。このような闘いはとてもみじめです。教会の悲劇は自分の力で罪と闘い、我慢することです。我慢はいつか爆発し、終わりを迎えます。これは神様が一緒にいる状態ではありません。私達自身が闘っているのです。

■ 真理に属する恵み(ローマ8章3～4節)

私達には弱さがあり、自分自身こそいつも失敗を繰り返す者なのです。だからあの人のやることもよくわかる、と、一緒によくなるうとするのが家族です。あなたはまだ誰かを裁いていませんか?あなたはイエスの御名によって死んだのです。過去にしてしまった裏切りや失敗や過ちを断ち切ってください。もういいのです。神様は忘れられたら、終わりです。どんなことをやってもその罪は出てこないのです。それが、御霊に属する者の恵みです。

■ クリスチャンに与えられた二つの選択(5～8節)

ガラテヤ5:19-26

肉に生きる人と、御霊に生きる人の違いが書かれています。私達が神様を喜ばせることのできる方法は1つです。イエス様のところに行こうという決断だけです。道を間違えそうになります、一度自分に死んだからといって失敗をします。何度だって誘惑に遭います。感情的になった時、いつもの方法ではなく、その時に、イエス様のところに帰ろうとする、それだけでいいのです。「帰ろう。」これこそが御霊に属する生き方です。毎日、それをしなければなりません。

■ 信じるものと信じないもの(9節)

クリスチャンになったときに何が起こったのかということが書かれています。もうすでに信じたものになった私達は御霊の中において、それは信じないものとの違いが記されています。

■ 信じるものにおきたこと(10節)

もうあなたは義です。体は罪の中に死んだからですと言われている。神様によって義と認められたという信仰を持っているのです。罪人だと認め赦されて義とされたのです。罪を認めなければ義となれません。何故なら赦されないからです。相手と向き合う時に自らが悪かったことを認めることが必要です。そうすれば和解がおこりますが、認めなければ、誤る理由がありません。神様の前に自分が悪かったことを認めて謝ることが始まりなのです。その後で誤解が解けていきます。喧嘩は双方が謝ることが大切です。

■ 信じるものの将来(11節)

死ぬべき身体も生かすとはどういうことでしょうか。私達は過去に悪い種を蒔いてきました。赦されたけれど、そこから芽は生えてきます。そんな死ぬべき身体も生かすと言って下さっているのです。この御言葉は、過去に通ってきた悲しみ、苦しみ、痛みが、益となる前ぶれです。(28節)の御言葉に繋がっていきます。私達が撒いてきた悪い種さえも、主は脱穀機で散らしエネルギーに変えて畑の栄養にすることが出来るのです。そして、なるはずのなかった実を成らすことが出来るのです。それが御霊の実です。全てを益としてくださる神様の元に24時間帰りましょう。その為にあなたが感情的になった時にイエス様の扉を開ける、心に自制を与える言葉をひとつ用意しておきましょう。

■ クリスチャンと義務の責任(12節)

肉に従って歩む責任を、肉に対して負っていません。ですからもうあなたのやり方で生きないで下さい。放蕩息子の記事のお父さんの処に帰った息子と、待っていた父(イエス・キリスト)です。

■ クリスチャンの永遠の地位(13節)、神の子として、次週へ(13節)

あなたは神の子どものであり、相続人です。主の元へ帰る時、罪人から神の子どもへと変えられるのです。そこには目に見えない宝が用意されているのです。罪人であると分かった人への恵みは祝福が変わります。だから今日、主の元に帰る決断がいののです。

(要約者・富岡 牧)

(2019年7月21日)